

フランスの映画監督ロベール・ブレッソンは、1950年代以降、プロの俳優を一切起用せず、演技の素人を映画で使用し続けた。この素人俳優たちはブレッソンによって「モデル」と名付けられ、非常に節制された独特の演技様式を用いた。モデルの顔にはほとんど表情が見られず、セリフを読む声にも抑揚がなく、動きも機械的である。

自著『シネマトグラフ覚書(*Notes sur le cinématographe*, 1975)』において、ブレッソンは、モデルをプロの俳優の対極に位置付け、「演技をしない」ものとして定義した。一方で、映画研究史上では、ブレッソン自身の「モデルは演技をしない」という発言は額面通り受け入れられてはこなかった。むしろ、モデルは俳優の特殊な形態であるとみなされ、そこに一つの演技様式が存在すると考えられてきたのである。それ故、モデルは、映画史における特殊な演技様式の代表例として、研究上の考察の対象となってきた。

問題なのは、モデルに関する先行研究が、概して作家主義的な傾向を孕んでいる、という事である。というのも、先行研究の多くは、ブレッソンがカトリックであったという事実や、撮影現場における彼の厳格さなど、ブレッソンの個人的な情報を積極的にモデルの解釈に介入させてきたからだ。現状の映画研究において作家主義が批判の対象となっていることを考えると、このような先行研究の態度は、既に説得力を失っていると考えられる。

よって、本発表では、作家個人に関する情報との関連でモデルを解釈するのではなく、演技を主眼に置いた作品分析を中心に据えることで、「作品それ自体の中でモデルの演技様式が果たす機能」を解明することを試みる。この際発表者が依拠するのは、「映画における演技論」(以下「映画演技論」と記す)である。映画演技論は2000年代以降になって本格化した映画研究における分野であり、映画の演技に対する新たな分析方法を提供している。また、映画演技論においては、演技という要素は、フレーミングや編集といった他の映画的コードと同等の重要性を持つものとして捉えられ、演技と他の諸コードとの関係性が重要になる。

以上を踏まえ、本発表の流れは次のようになる。

第一に、理論的な考察から始め、『シネマトグラフ覚書』や彼のインタビューを中心に、ブレッソン自身のモデルに対する考えを抽出する。また、この結果をもとに、一般的な俳優とモデルとの間にある理念的な差異を導く。第二に、ブレッソンの後期作品を中心とした作品分析に移り、演技自体、また、演技と他の映画的コードとの相互作用に着目する。この作業を通して、作品中においてモデルが如何なる機能を果たしているのかを求める。ひいては、第一段階で求められたブレッソン自身の理念と従来の作家主義的研究を、第二段階の成果に突合せ、両者に対して批判的考察を行う。以上の作業を通じ、新たなモデル観の提示を試みる。